

---

# 初めては幼なじみ

亜果利

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初めては幼なじみ

### 【NNコード】

N5429Y

### 【作者名】

亜果利

### 【あらすじ】

高校一年生の高井沙都は、彼氏が出来たその日、隣に住む幼なじみの畠野涼に押し倒されてしまう。

そして、涼と結ばれ、涼への熱い想いに気づく。

彼氏ができたんだ（前書き）

幼なじみとの恋。  
複雑な恋愛です。

## 彼氏ができたんだ

「涼。聞いてー」

わたしこと、高井沙都は、学校帰りの制服のまま、隣に住む幼なじみの畠野涼の部屋のドアを開けた。

「なに?」

涼はベッドの上に、コロコンと横に寝そべって、モンハンしていた。

「あのひ、わたし、彼氏ができた」

わたしの言葉にチラリとこちらを見た涼は、ゲームをやめてベッドから起きあがった。

「彼氏?」

「うん。となりのクラスの青木文也くん。野球部だよ。涼はサッカーボードだから、グラウンドで見たことあるでしょ?」

そういうながら、涼のとなりにチヨコーンとすわって、陽に焼けた顔をのぞき込んだ。

「なんだよ……それ

「え?」

「沙都、おまえ、そいつが好きだなんて言ったことなかつただろ?」涼が手にもっていたPSPをベッドにほうりなげた。

「うん。だって、今日告白されて、初めて青木くんのこと知ったんだもん。なかなかイケメンだし、カッコイイって思つたから」

「はあ? なにそれ?」

いつも、ボウつてしている涼がきゅうに怖い顔をした。

小さい頃から毎日会つてて、同じ年で、小、中、高全部一緒に、わたしの言つことを聞いてくれてた涼が……

わたしをにらみつけた。

「いいじゃん。別に。わたしのこと好きだつて言つてくれたんだもん

にらんでくる涼から目をそらして、そうつぶやいた。

「ん

「自分のこと好きだつて言つてくれた男なら誰でも付せ合ひのかよ」

「誰でもつて、わけじゃないけど……」

「その青木つてヤツがカツコよかつたからか?」

「うん。まあ……そんなかんじかな」

「おまえ、それでいいのかよ」

いきなり、もの凄い力で、右腕をつかまれた。

「いたい。いたいよ。涼……」

「そいつが、こんなふうに、腕つかんできたらお前、どうすんの?」

いつもの涼じやなかつた。

色素のうすい、茶色がかつた目を大きくみひらいて、 irgendは左腕をつかんできた。

「青木クンはこんな乱暴しないよ」

首を振つて抗議した。

「お前、そいつの彼女になるんだね?」それくらいに覚悟しこたほうがいいんじやね?」

ベッドに両膝をついた涼が、わたしに顔を近づけてきた。

「わたしに彼ができたからつて、逆ギレしないでよ

「逆ギレ?」

「自分は彼女いないからつて、当然なつてこと。涼だつて、この前告白された子と付き合えばよかつたんじやない」

すると、わたしの両腕を持ったまま、そのまま、おおいかぶさつてきて、わたしがベッドの上に押し倒された。

## 涼と結ばれて

倒れ込んだでも、涼はわたしの両腕をベッドに押し付けたまま、はない。

手首を強くにぎつたままだ。

「俺は、沙都みたいに……誰でもいいなんて、どうでもいい気持ちで女と付き合えないんだ」

「それなら……わたしに当るひとないじちゃんか。はなしてよ」

そう言つて、眼の前十センチまで顔を近づけてきた涼をおもい切りにらんだ。

「バカヤロウ！」

耳元でどなりつけてきた。

「耳元でそんな大声出さないでよ」

すると……涼が、きゅうに泣きそうな顔をして

「俺の気持ち、お前……本当にわかるないの？」

田の前の涼のうすこ唇が震え出した。

「涼……の気持ち？」

「沙都が、コンビニのプリン食べたいって言つたら買つてきたり、沙都の好きなアイドルのDVD予約したり、眠いのに、女友達とケンカしたお前の悩みきいたり……俺は……お前のなんだったんだ？兄妹か？やっぱ……ただの幼なじみなのか？」

「涼……」

涼の切れ長の田からポロリと涙がこぼれた。

そして、わたしの頬にポタリと落ちた。

「俺は……ずっと……沙都が好きだつたんだ」

そう言つた涼が……

はじめて

男子に見えた。

ただの幼なじみの涼が……

男に見えた。

わたしの方がずっと背が高かつたのに、いつのまにか追い越されて……

それでも、ずっと涼はわたしの幼なじみだと思つてた。

なんでも、わたしのこと分かつてくれて、言つことを聞いてくれる、都合のいい幼なじみだと思ってた。

そして、今、男の顔で泣き出した。

サッカーしているときの真剣な顔とはまた違う、初めて見る涼の男の顔。

ゆっくりと、わたしの腕をはなしてくれた。

つかまれていた手首がジンジン痛む。

震えながら、涼のほほに手を伸ばした。

「涼……」

もうひとしずく……涙が落ちそうで、それを指ですくつた。

「だから……好きでもないヤツと付き合つたりするなよ」

「涼……」

「沙都が……ほかの男にキスされたり、抱かれたりするのを想像するだけで……俺、発狂しそうだ」

「涼……発狂なんかしないでよ」

「沙都……」

涼がゆっくりと顔を近づけてきた。唇が重なった。

まさかのファーストキス。

「イヤだつて……言わないのか？」

目を閉じたまま

「言わない……よ」

そう返事をすると同時に、

フワリ、フワリと重なつては離れて……

そして、だんだん重なつてはいるほつが長くなつて口の中に舌が入り込んできた。

何度も何度も舌を絡めて来て、離れる度に、吐息がもれて……

「あつ……涼……」

何も抵抗できなかつた。

## 涼と結ばれて

涼の唇が首すじにおりてきて、手のひらは制服のブラウスの上から胸に触ってきた。

ゆっくりと、優しく、胸にタッチされて、頭のなかがボウっとし始めた。

「あ……涼……」

「沙都……沙都……好きだ」

耳元でそうをさやかれて、涼の広い背中に腕を回した。

「涼……」

ブラウスのボタンを一つ一つ外しながら、涼はわたしにキスの雨を降らした。

「沙都……俺……とまんねえ」

ブラウスをはぎ取られて、ブラの上から、手のひらで胸を包まれた。さすがに恥ずかしかったけど、振り払うなんて考えなかつた。

唇をふさがれたまま、背中のブラのホックを外された。ブラによって形づけられていた胸がフワリと緩んだ。

涼の唇が下に降りてきて、胸にキスをする。

少し、茶色掛った髪の中に指を入れて、恥ずかしさをまきわらした。からだ中が火照りだした。

涼によつて、だんだん心が熱くなり、大きな安心感に包まれている涼の匂いがこんなに近くに感じられて大きな安心感に包まれているのが分かつた。

きつかけなんて、こんなもんだつたんだ。

いつもそばにいた涼の体温がこんなに間近で感じて、イヤなビードルか、

身体中がもつと、もつと叫んでいるように涼を欲しがつた。

決定的な何かがなければ、わたしと涼はいつまでも平行線で、交わ

ることなど無かつた。はず。

「あ……涼……」

「沙都……沙都への思いは……中途半端な思いじやないから」「涼の声に閉じていた目をゆっくり開いた。

お互い……何もまとわない、裸のままだつた。  
いつもそばにいて、兄妹のように育つて來た。  
一緒に、こんな風に裸になつてお風呂に入つたことさえあつた。

何年前だろう?

まだ、十六歳同士だけど……わたしたちはいつの間にか大人になつてた。

誕生日は涼の方が早かつたけど、わたしのほうがいつも涼を引っ張つて來た。

泣き虫だつた涼の身体は、とても筋肉質で、大人の男の身体だ。  
それとは逆にわたしは胸がふくらんで來て、薄着で涼に近づくと、  
フイに目をそらしたりした涼に

「スケベ」

なんてからかつてきたけど

今は、そんなこと言え無くて……

涼が、わたしを大事に思つてくれているのが伝わつて來たから、何も言えず、ただ

涼の思うままに。

身体をゆっくり開いて……

涼と一つになつた。

「沙都……沙都……好きだ。俺、沙都が好きだ」

耳元でなんどもささやいて來た。  
痛くて歯を喰いしばつた。

顔をしかめたわたしに、優しく何度もキスをしてくれた。

でも、とても幸せな時間だった。

涼の甘い吐息に頭がクラクラして來た。

力強くて、優しくて……涼が愛しくて仕方がなかつた。

## 涼に抱かれて

二人だけの涼の家で、気が付けば窓の外はオレンジ色が消えて、薄紫に変わっていた。

「さ……沙都？」

涼がわたしの髪の毛をかきあげて来た。わたしは涼のベッドにうつ伏せのまま。

「沙都？ 大丈夫か？」

涼があんまり優しい声でそう言つから涙が込み上げて來た。

「もうすぐ……母さんが帰つてくる」

「うん……」

涼の顔が恥ずかしくて見られなかつた。

「お前……断われよ」

「……」

「青木なんかと付き合つなよ」

「じゃあ……涼が彼氏になつてくれるの？」

枕に顔を押し付けてそつ言つた。

「今さら……だよな」

「え？」

「今さら、沙都と付き合つてますなんて、宣言しないといけない」

「はあ？」

「お前、クラスのみんなに言えるか？ 僕が彼になつたって。父さんや母さんたちにいえるか？」

いつもみんなでつるんでいるメンバーが頭に浮かんだ。

そして、自分の両親の顔も頭に浮べた。

この上なく冷やかされるに決まっている。

「確かに……言いにくい」

「オヤジには、結婚相手がいなかつたら沙都にしじとか冷やかされてるし……そのまんまだし、シャクにさわる

「沙都、ほり、早く服着ろ」

涼が制服のブラウスを放り投げて来た。

「涼……ブラガさき。取つて」

枕に顔を押し付けて、腕だけ涼に差し出した。

「ブラつて……」

涼がベッドの下に落ちたブラを拾つて渡してくれた。

「沙都……意外と、胸あんだな」

「きやーーきやーー！思ひださないでよ」

そう叫んで薄手の布団を頭からかぶりこんだ。

「もう、涼の頭からわたしを消してー」

「ごめん。そう、怒んなよ」

「怒る！メツチャ恥ずかしいんだからー」

「俺……沙都がなんて言おうと、今日のことは一生忘れないからな

かぶり込んだ布団から少しだけ顔を出して

涼を見ると、わたしの視線に合つようになしゃがんで、じっと顔をのぞき込んできた。

「俺、今日の沙都、絶対忘れないから  
チユツ

顔だけ出したわたしの額に軽くキスを落として来た。

「俺らさ、内緒で……付き合おつ

「内緒で？お母さんたちにも？」

「うん。内緒で……」

涼のわたしを見る目が昨日までと全然違つてた。  
全然違つて……

とつても優しくなった気がした。

薄紫色の部屋の中で、涼が一コリと微笑んだ。

「俺、下にいるから。その間に服着ろよ

それだけ言って涼が部屋を出て行つた

## 涼の家で食事

着替えを終えて、階段を降りると、玄関先で涼のお母さんが会合わせた。

「あら、沙都ちゃん。來てたの？」

「あつ……うん。ハハハ、今日の宿題どーじだつたかな?つて涼に聞きに來たの」

多分、今までで一番顔が引きつっていたと想ひ。

冷や汗が出てきた。

「涼は部屋？」

「うつん。リビングにいると思つけど」

「わづ。沙都ちゃん、夕飯食べる?ほら、ケンタッキー買つてきたの」

涼によく似たお母さんが一匹ごと笑つてフライドチキンの入ったレジ袋を見せた。

さすがに今夜はここに居たくない。

「イヤ……いいかな」

「あれ?珍しいなあ。沙都ちゃんが遠慮するなんて。ほら、食べてきな」

涼のお母さんに背中を押されて、リビングに入ると、ソファに座る涼と田が合つた。

血が逆流。

顔が熱くなつて沸騰しそうだつた。

涼に……さつき、裸見られたんだ。

涼は平然とした顔で、目を逸らす。

「あれ?もしかして、一人ケンカでもした?」

涼のお母さんがわたしと涼の顔を交互に見る。

「ケンカなんかしてないよ。なあ?」

涼がチラリとこっちを見て、直ぐ目をそらす。

「うん。うん。ケンカなんかしてない」

「そう? ヤケによそよそしく見えたから」

涼がテーブルの上の新聞を手にして顔を隠して

「それより、俺、腹へつた」

涼……お願い。そのままずつと顔を隠して。

夕飯のしたくがきて、涼と隣同士で椅子に座った。  
わたしの目の前には涼のお父さんが二コ一コした顔。  
涼のお父さんはわたしがここに来るといつも上機嫌だ。  
でも、今夜はなんか、ぎこちなくて、ソワソワしてしまった。  
前も見れないし、隣の涼の顔も見れない。

モクモクとご飯を食べた。

「沙都ちゃん、元気ないね。どうかした?」

「いえ……なんもないです」

「いつもの食欲がないんじゃないのかい?」

涼のお父さんが一コリと笑う。

わたし、こつもそんなに食べてるのかな?

「ちょっと……ダイエット中で……」

「もしかして……沙都ちゃん彼氏出来たとか?」

「そ……そんなんじゃないです」

「沙都に……彼なんか、できるはずないじゃん」

涼がポツリと呟いた。

「あ~。わたし、友達から電話が掛つて来るんだ~。携帯を家に置いて

いて来たから、帰ろうかな」

「う~ちそうをまでした」

「イエイエ。涼だつて、沙都ちゃん家で、食べたりするんだし、また、夕飯食べに来てね」

涼のお母さんが、そう言って、お茶を飲んだ。

「俺、ちょっと……ノンビリ行って来る」

わたしと同じように涼が立ち上がった。

涼と二人、玄関を出ると、フイに涼が腕を掴んできた。

「沙都……お前、意識しそぞ」

「当り前じゃんか」

「あのや……もしかして、後悔してるのか？」

涼が顔を上げて、わたしをジッと見つめてきた。  
下を向いて顔を横に振り

「ううん。後悔……してない」

「そつか。それなら良かつた。沙都……明日、学校終わったら部屋  
に来いよ」

「部屋？」

「俺の部屋。明日も、母さん帰りが遅いし」

毎日通つてた涼の部屋。

前の日から来いだなんて、初めてだ。

涼は……わたしを呼んで、どうするつもりだろ？

「絶対に来いよ」

「明日……青木くんと一緒に帰る約束しているんだけど……

「青木に断るんだろ？」

「うん。その時、青木くんに話そつかと思つ」

「じゃあ……その後くればいいだろ？ 俺、待つてるから」

「うん。分かった」

わたしの家の玄関前で、涼と別れた。

その夜、青木くんからメールがあつた。

僕の可愛い彼女ちゃんへ  
これからはよろしくね。

友達に美味しいケーキの店聞きましたから  
あした、学校の帰りにより道しよう。

そう、書かれていた。

青木クンがわたしのこと好きだつてきもちがよく分かった。  
あしたはなんて言おひ。

「やっぱり、付き合えません」

そういうのがなきうだ。

## 次の日学校で

次の日、教室に入ると友達の栗木真菜がわたしに飛び付いて来た。  
「沙都、おはよ。聞いたよ。青木クンと付き合つようになつたんだ  
つて？」

真菜の大声が教室中に響いた。

朝連で、先に来ていた涼が、こつちを見てきた。  
ちよつと怖い顔になつた。

涼……

「え～。沙都と青木クンが？」

いつもつるんでる一人が駆け寄つて來た。

「じゃあ、みんなでお祝いしよ～」

「祝福にはカラオケだね」

何かあると直ぐにみんなカラオケに行きたがる。

涼がまたこつちを見てきた。

胸の奥がキュンとなつた。

何も言わない涼。

氣だるそうに椅子に座つて窓の外を見ている。

上から三個目まで開けた制服のシャツから筋肉質の肌が見えた。

「沙都……好きだ」

昨日の涼の言葉。

あの胸に抱かれたんだ。

あの目に全てを見られたんだ。

そして、あの背中にしがみ付いた。

そう思つとまた、恥ずかしくなつた。

「沙都？ ものすごく顔赤いよ。そんなに嬉しい？」

「そ……そ、うじやないよ」

必死で首を振った。

真菜の言葉に涼が反応して、またこっちを見てきた。

目を逸らした。

やっぱ、涼の顔とともに見れない。  
この場から消えてなくなりたかった。

「男子」。行きたい人」「

真菜のこの指とまれが始まった。

「俺行く」

涼の隣の席の男子が声を上げた。

「涼も行くだろ?」

当然みたいに涼の名前も出した。

結局、涼を含めたいつものメンバー六人プラス青木クンで、カラオケに行くことになった。

## 意識し過ぎのわたし

授業中は、全然身に入らなかつた。

背中から、涼の視線を痛いほど感じていたから。

実際にわたしを見ていたのか、分からなかつたが、変に意識し過ぎているわたしがいた。

昨日のこと思い出しているんじゃないのか？

ブラウスを脱いだわたしを想像しているんじゃないのか？

そんなことを考えると、体中の血液が両耳へと逆流し、象の耳みたいに大きくなり、真っ赤になつてパタパタ動いているように思えた。

『沙都の耳真っ赤だ』とか思われているんじゃないのか？

支離滅裂なことばかりを考え、授業を終え、休憩時間に入つても、涼の席を見ることが出来ずにいた。

涼の席を見ることが出来ずにいた。

大きなため息を付きながら、椅子に座つたまま、机に顔をひつ付けて。

消えて無くなりたい……

涼への気持ちは意識して無かつた分、かなり自分へ打撃を受けた。

こんなに涼が好きだつたなんて……

机に伏せつたまま、また、大きなため息を付いた。

その日のお昼やすみ。青木クンからメールが来て一緒に食べないかと誘われたが、そんな気になれなくて、何かと理由をつけて断つた。今日は朝から、わたしの彼が出来たとその話で持ち切りだつたから、苦しくて一人になりたかった。

青木クンに断りを言つてないのに、みんなに否定出来なかつた。

人気の無い向かい校舎の一階の踊り場。

大きくため息を付いてしゃがみ込んだ。

「沙都……」

聞き慣れた涼の声がした。

見上げると朝からずっと怖い顔の涼が立っていた。

「涼……」

「あんまり……嬉しそうな顔してんじゃねえ」

「涼……」

「もうちょっとで、俺が沙都の彼だつて言いつになつた」

立ち上がり涼の腕を引っ張つた。

「涼……青木クン傷付けたくないの。だから……お願い、みんなに言わないで。ちょっと待つて」

「沙都……」

腕を引き寄せられて抱きしめられた。

「りょ……」

唇で思い切り塞がれ、いきなり舌を絡めて来た。

腰を引き寄せられ、逃げられない。

「あ……」

昨日、何度も交わしたキス。

また、頭の中がボウつとなつた。

涼の顔が恥ずかしくてギュッと目を閉じた。

何度も角度を変えて、カブリつくようなキス。

人が来たらどうしよう。

なんて、言いわけすればいい。

抵抗できないま、膝の力が抜けそつた。

「あふ……」

「沙都ごめん……もう、俺、沙都への思いは抑えねえから」

そう言つてまた、唇をかさねてきた。

「涼……」

「沙都は……誰にもやんねえ」

「涼が……好き」

授業開始のチャイムがなるまで、わたしは何度も涼とキスをしてい

た。

## こつものメンバーで

部活が終わって、みんなと校門で待ち合わせた。チアリーダー部のわたしと真菜が一番早くつた。

「やっぱ運動部は遅いね」

真菜がポニーテールに結んでいた髪をほじきながら走った。

「うん。後かたづけとかあるもんね」

グラウンドの方を見ると、陽に焼けた青木くんが手を振りながら走つて來た。

「沙都ちゃん」

青木くんの笑顔にドキンとした。

でも、このドキンは好きな人に向けてのドキンじゃなくて彼女になつたその日に青木くんを裏切つたわたしの良心が、ドキンとしたんだ。

青木くんの笑顔には、わたしに対しての疑いなどひとつもない。ドキン

「沙都ちゃん……なんか……みんなからお祝いのカラオケとか聞いてびっくりした」

そう言いながら、わたしの前に立つた青木くんはとても嬉しそう。

「うん。『ごめんね。いつものグループにつき合わせちゃつて』

「ううん。それだけ沙都ちゃんが人気者つてことだろ?」

そう言つて……

さり気なく、わたしの手に触れて、握りしめてきた。

これつて……

「お~。さつそく恋人繋ぎですか? な~んか当てられるな~。このままじゃ、わたし、完全にオジヤマ虫だな。もう、みんな早く来~い」

真菜、ソワソワとグラウンドに向けて大声をあげた。

わたしは、青木クンの手を振り払えずについた。

そして、後悔した。

こうなる前に……真菜にだけでも事情を話すべきだったと。

今日のこのカラオケも中止して貰えれば良かった。

いつもの乗りに乗つかつて、ズルズル来てしまつた。

涼とのことを隠そう、隠そうとする思いが結局何も言い出せず、何も行動出来なかつた。

涼とあんなことがあつて、正直今日の授業中だつて、涼とのことといつぱいだつた。

恥ずかしいのはもちろんだけど、いつもそばにいた幼なじみの涼が急に男の子として変貌したんだ。思い出すだけで胸がいっぱいになつた。涼の手とか吐息とか匂いとか、何度も鮮明によみがえつて来たんだ。その度に顔が熱くなつて、冷や汗が出て来ていた。

今まで涼は傍にいたけど、わたしから、最低二三十センチの距離はずっと保つてくれてた。

たまにジャレあって、身体に触れたりしたことはあつたけど、その度に「ゴメン」と言つて

謝つてくれたのは涼のほうだ。

今思えば、涼は確かにわたしに優しかつたし、いつも気を使ってくれてた。

辛い時だつて、何も言わず、傍にいてくれてた。

鈍感。

涼の気持ちにも、自分の気持ちにもあんなことが無いと氣付かないわたしは、この上ない鈍感女だ。

## こつものメンバーで

涼……今のわたしと青木クンを見たら、なんて思うだろ？。  
どうしよう？……

涼とのことで浮かれている場合じゃないのに……

「沙都ちゃんの手、ちこさいね。俺の手、マメだらけでゴシゴシしてるだろ？」

野球のバッドを握るからなのか、確かに手のひらがゴシゴシしていた。

こんなこと言われたら、ますます手を離せなくなった。

次に、校門前に現れたのは、涼と、涼と同じサッカー部西本達樹だった。

「あっれー。沙都、もうラブラブ見せつけてやんの」

達樹のその言葉と同時に涼と視線が絡み合った。

口を一文字に結んで、明らかに怒った様子だった。

思わず、青木クンの手を振り払おうかと躊躇したが、やはり青木クンのことを思うと実行に移せなかつた。

涼と達樹の後を必死で追いかけて来た見られる吉村水華が

「なに？ ラブラブしたいの？」

そう言いながら、達樹の腕に巻き付く。

水華は達樹の彼女だ。

剣道部の水華は、長い髪を女剣士らしくキリリとしめ上げ、女のわたくしから見てもかなりかっこいい。

「沙都、稻本今日はバスだつてさ」

稻本和也とは、水華と同じ剣道の男子部員だ。

「え、稻本バス？ ジヤあ、わたし、今日だけ涼の彼女になろう」とあぶれていた真菜が涼の腕に巻き付いた。

ドッキン

真菜の行動に今日、一番の胸の高鳴りを感じた。

胸が大きく音を立てて、苦しくなつた。

「今日だけじゃなく、ついでに付き合つちゃいなよ」

水華が、達樹の腕に巻き付いたまま切れ長の目をクリクリさせた。

「うーん。でもなあ、涼は一、二年生の先輩たちに超、人気があるしなあ。付き合つとなると厄介だな」

真菜がそう言いながら先輩たちがいないか、グラウンドの方をうかがう。

「畠野涼クン、サッカー部だよね。うちのクラスの女の子たちにも人気あるみたいだよ」

何も知らない青木クンが気兼ねなく涼にそう、話かけた。

「人気なんて無いし……真菜、俺にだつて選ぶ権利あんだからな」涼が不貞腐れた顔で、そう言つてトイと顔を横向け、スタスタ歩き出した。

そう言われた真菜はそれでも涼の腕を離そつとせず、後に続いた。

「俺らも急ごう」

達樹がわたらしたちに向かつてそう言い、わたしと青木クンも涼を追いかけるように歩き出した。

## カラオケボックスで

ルルルルルル ルルルルル ルルルル  
少し歩きだしたと同時に、青木クンの携帯が鳴り始めたのか、わたしの手を離して、四、五メートル後に下がった。

別の友達からのようで、嬉しそうに話し始めた。青木クンの電話を立ち止まって、待っていると、前を歩いていた達樹が一人でわたしの方に近づいて来て

「涼さあ。さっきまで部活で、すっげー上機嫌だつたのに、ここに来た途端、機嫌斜めになつたぞ。沙都、お前……涼となんかあつたのか？」

いつになく真剣な顔の達樹。

「ううん。何もないけど」

「お前うそ……俺にだけは嘘付くなよ。俺と涼と沙都はどれだけの時間一緒にいると思ってんの？別に言いたくないならそれでいいけどさあ。まあ、後で涼を尋問にかけるし」

それだけ小声で言つて、一回わたしの肩を叩いて、水華の方へと駆けて行つた。

達樹……

涼と一緒に小学校の頃からずっとサッカーをやつて來たんだ。

当然、わたしとも長い付き合いだ。

そんな達樹が、わたしと涼の関係にいち早く気が付いても、不思議はない。

達樹に話せば……お前、何やつてんの？

そう、言つて失笑されるだろ？

## カラオケボックスで

青木クンの電話が終わり次第、いつものカラオケ店に向かった。店に着くと涼が先に店員に部屋をかけあってくれていた。あいかわらず、真菜が涼の腕にしがみ付いて離れていない。真菜の横顔をうかがつた。

とても嬉しそうな顔をしている。

真菜……

もしかして、真菜は涼のことが……

自分の気持ちにも、涼の気持ちにも気が付かなかつたわたしが、真菜の気持ちに気付くはずない。

あのアイドルが好きだ、こっちのほうがカッコイイ。そんな、現実味のない当たり障りのない話題でいつも盛り上がっていた。

真菜とも水華とも高校に入学してから友達になつた。

友達になつて、まだ三ヶ月しか経っていない。

高校になると、達樹に水華という彼女が出来て、それで、少し、テレビの向こうの世界ではなく、眞面目にだれかステキな彼と付き合いたいと思い始めていた矢先だつた。

わたしにとって、このクラスの仲間はワイワイ言い合つただの友達に過ぎなかつたんだ。

だから、涼はだれが好きだとか、真菜はだれが好きだとか、氣にも止めていなかつた。

昨日、涼と抱き合つて、眼の前にかかつっていたフィルターが消えてなくなつた。

見るもの全てが変わつて見え始めた。

そして、大事なモノが……くつきりとしたかたちで、目の前に現れた。

涼……

いつも傍にいた涼の全てが愛しくて、心の底から無言で叫んでいた。

『涼から離れて』

青木クンには悪いと思つたけど、電話が終わつて駆け寄つて来た時、わたしは手を制服のベストのポケットに突っ込んで、手は繋じりとしなかつた。

青木クンはその話題はスル してくれたけど、やはり、氣を悪くしたにちがいない。

店員に部屋へと案内され、十名ほど入る個室へと入つた。涼は相変わらず不機嫌な顔で、真菜の手を振りほどいてドカッとソファに座つた。

涼の隣には、すかさず真菜が……

わたしはそんな涼と真菜に向かい合つように青木クンと隣同士にソファに座つた。

達樹と水華は、涼と真菜の隣に座り、早速歌う歌を検索し始めている。

薄暗い部屋の中で、達樹と水華の笑いあう声が響いていた。

青木クンの横顔をチラリと見ると、歌う気は無さそうで、ドリンクメニューを手にしていた。

達樹がマイクを手にして歌い始めた。いつもなら、涼がこれでもかとヤジを飛ばすのに、今日は一言も声を掛けずに、選曲用のリモコンばかりを弄つている。

わたしも歌う氣にもなれず、そんな涼の姿をボンヤリと眺めていた。達樹の歌が済んで、水華、真菜へと続いて、また、さつき歌つたばかりの達樹がマイクを持つた。

青木クンは好きな歌ばかりだと言つて、みんなの歌を聞き入つていた。

注文したみんなのドリンクが運ばれてきて、それを全て飲みほした頃、青木クンが急に席を立つた。

「沙都ちゃん。あのや、俺、今から同じ野球部の子の家に県大会の日程表のプリントを持って行かなきゃいけないから、これで帰るよ」

「日程表？」

「うん。そいつ、今日は部活を休んだからさ」

すると、真菜が

「沙都も一緒に帰つていいよ。ラブラブして、一人きりで帰りなよ」  
氣を利かせているんだぞと言わんばかりの勢いで、そつと語ってきた。

「じゃあ……沙都ちゃんも途中まで一緒にかえろ？」

立っていた青木クンがわたしの腕を掴んで引っ張り上げて来た。

一人切り……

『ごめんなさい』を言つてい機会かもしれない。

青木クンに付き合えないと断りを言つ、絶好のチャンスだ。  
だけど……心は、涼と真菜のことが気になる。

真菜に涼を持つて行かれそうで……そう思うと胸が苦しくなった。

青木クンに腕を引っ張られたまま、席を立つた。

「みんなの沙都ちゃんは俺が責任持つて送り届けるから」

青木クンが気さくにそう言ってみんなに笑い掛けた。

「沙都）。今日はわたしたちの奢りだからね～。お金は気にしない  
でよ」

水華が一ヶコリ笑つて、手を振つてくれた。

「うん。ありがと。じゃあね」

みんなに手をふる青木クンに、腕を取られたまま、個室の出入り口  
ドアの前で涼の顔を窺つた。

これでもかと言つくらい、熱い視線を浴びせて來た。

目力が凄かつた。

そんな涼と見つめ合いながら、涙が出そうになつたが、青木クンに  
促されて、個室の外に出た。

## 一人きりの帰り道

店の外は陽が落ちて、薄暗い紫色の風景だった。街燈がポツリポツリと付き始めて、会社帰りのサラリーマンや下校中の学生たちが歩道を行き交っていた。

その人ごみの中を、青木クンと肩を並べて歩いた。わたしの手はやはり、制服のベストのポケットに手を突つこんだままだつた。わたしより、二十センチ以上も背が高い青木クンが俯き加減で話しかけてきた。

「沙都ちゃんって……西中出身だよね」

「うん。そうだよ。わたくしのメンバーの男子たちもみんな西中出身だよ」

「俺も緑中出身なんだけど。中学の時、一度、西中で練習試合したことあるんだ。その時、沙都ちゃん、何人かの女子たちと応援に来てたこと覚えてない？」

ちょうど一年程まえ、同じクラスだった野球部の子の練習試合をクラスの女子何名かで即席のチアリーダー部もどきを結成して、応援したことがあった。ラメ入りのポンポンなんかを作つて、冷やかし半分で、応援したことが……

「行つたことがある。あれ、緑中との試合だつたの？」

「酷いなあ。応援に来て相手チームの学校も知らなかつたの？」  
練習試合だし、勝つか負けるかだけしか考えて無かつたから、相手チームがどことかあまり気に止めてなかつた。

「あの試合で……沙都ちゃんを見て、可愛い子だつてずっと思つてたんだ。自分のチームがミスしても、点入れてもキヤッキヤッ笑つて騒いでたよね」

確かに、応援していたと言うより、騒いでたつてほつがあつていた気がする。

「青木クンつてポジションど二?」

「俺？一応ピッチャーしてたんだけど。試合しながら、相手チームのチアリーダーのこと見てたって、それもかなり問題があるんだけどね」「うーん」

青木クンが照れくさそうに笑った。

結局、あの試合は、うちのチームがボロ負けして、クラスの野球部に女子全員でカツを入れてやった。

その時、野球部たちが言つてた。

『相手のピッチャーが良過ぎたんだ。あいつ、県の選抜ピッチャーだぞ。俺らが打てるわけないだろ？』

その開き直った態度にもう一度、女子全員で激怒した覚えがある。

「高校に入学して、一番先に沙都ちゃんのこと見つけて、あの試合の時を思い出したんだ。だから、こいつして、彼女になつてくれて、俺、凄く、嬉しいんだ」

青木クンは……中学の頃から、わたしのことを知つてて、それで、昨日、告白してくれたんだ。わたしの彼が出来ればそれでいいなんて、中途半端な、浅はかな考え方やなかつたんだ。

さつきの涼と真菜の一人の光景を思い出した。

真菜に涼を取られたくない。

今……言つしかない。

『ごめん』って言つしかない。

こんなに涼のことが好きなのに……青木クンとは付き合えない。

「ねえ。青木クン……あのね。わたし……」

「危ない！」

後から、通行人の男の人の叫び声が聞こえた。

## まわかの事故

その声に驚いたわたしは、青木クンに話しかけるのを止め、声のした方へ振り返ると

いきなり、左側を歩いていた青木クンに突き飛ばされた。

突き飛ばされた勢いで、わたしは歩道の上に両膝を着いた状態で、倒れ込んでしまった。

キイー！

自転車の急ブレーキの音。

少し、下り坂の人に行き交う薄暗い歩道。

ギャシャーッ！

その音と共に、隣にいた青木クンと自転車に乗った、女子高生が一緒に雪崩れ込むように倒れた。

青木クンの腰に自転車の前輪がブレーキの音と共に追突したのだ。国道と歩道の間に設置されたガードレールに、叩き付けられ地面に倒れ込んだ青木クン。

その背中に自転車と女子高生が折り重なるように倒れ込んだ。

「バカ野郎！」

通行人の男性が、その女子高生に罵声を浴びせた。

「大丈夫？」

中年のオバサンが、倒れたままの青木クンに駆け寄る。

その女子高生の耳にはイヤフォン。

「片手でメール打つてよ。この子！」

駆け寄つて来たサラリーマン風の男性の声。

「あなた、無灯火じゃない！」

〇一風の若い女性の声。

片手運転の上に無灯火。その上、耳にはイヤフォン。

わたしは身体が震えて歩道にしゃがみ込んだまま、立てずについた。

歩道に落ちたピンクの携帯。

倒れた自転車の後輪だけがカラカラ回る。

その光景を茫然と見ていた。

自転車に乗っていた長い茶パツの女の子が、中年のオバサンに助けてもらつてヨロヨロと立ち上がつた。

そして……青木クンが倒れたまま動かない。

「額から大量の血が出てる。救急車を呼んだほうがいいでしょう」歩道沿いの理髪店のおじさんが音と共に飛びだしてきて、倒れたままの青木クンを見て、サラリーマン風の男性にそう話しかけた。その男性は直ぐにスーツのポケットから携帯を取り出し、操作し始めた。

「あなたは、怪我は無い？」

理髪店の奥さんがわたしの顔を覗き込んでそう、たずねて来た。

身体も、膝も、顎もガクガク震えて返事さえ出来ない状態だった。

青木クン……

額から大量の血……

一瞬のことでの、青木クンはわたしを突き飛ばすのが精一杯で……自分の身を庇えなかつたんだ。

通行人が何人も集まつてきて、わたしたちを取り囲む。

グツタリした青木クンを見詰めながら涙がワッと溢れて來た。

理髪店の奥さんの肩に凭れかかるようにして立ち上がつた。

回りの喧騒とした雰囲気は伝わつて來ていたが、涙が溢れた目だけを見開いていた。

倒れた自転車の籠がグニヤリと折れ曲がつていて、どれほどの勢いで追突したのかを物語つていた。女子高生は右太ももと右膝をすり剥いて、血が出ていた。若いO・Sと中年のオバサンに両脇を抱えて貰つてようやく立つてているといった感じだつた。



まさかの事故で

理髪店の奥さんの肩に凭れかかるよつにして立ち上がつた。回りの喧騒とした雰囲気は伝わつて来ていたが、涙が溢れた目だけを見開いていた。

倒れた自転車の籠がグニヤリと折れ曲がっていて、どれほどの勢いで追突したのかを物語つていた。

女子高生は右太ももと右膝をすり剥いて、血が出でた。若いOLと中年のオバサンに両脇を抱えて貰つてようやく立つてゐるといった感じだつた。

救急車に連絡を入れてくれたサラリーマンが理髪店のオジサンにそうたずねた。

「怪我人が出ているんだ。仕方ないでしょ?」  
オジサンのその言葉に女子高生が青ざめて震え出した。  
どこにでもいるわたしと変わらない普通の女子高生。

イヤフォンに肩手携帯。  
わたしも何度かしたことがある。

警察

わたしたちは被害者だけど、決して人ごとではない事態。れっきとした犯罪になるんだ。

すると、倒れていた青木クンの足がピクリと動き出した。

「君、大丈夫か？」

サラリーマンが足を動かした青木クンに声を掛けた。

倒れたままの青木クンを見ていて、頭の隅で、もしかして死んでいるんじゃないかと震えていたわたしは、青木クンの微量の動きに安

堵しホッとした。

青木クン……

青木クンは起き上がるうとしている様子だったが  
「頭を打っているから大事を取つて動かさないほうがいい。このま  
まで、救急車を待ちなさい」

理髪店のオジサンがうつ伏せに寝ている青木クンの傍にしゃがんで  
耳元でそう囁いた。

青木クンは起き上がるのをやめた。

「青木クン！」

我に帰つたわたしは、オバサンの腕をはらつて、青木クンの傍に駆  
け寄り理髪店のオジサンの隣にしゃがみ込んだ。

青木クンの額は血で真つ赤で、短髪の髪には土埃が付いていた。わ  
たしの声に左目だけを薄く開いてくれた。

「お嬢ちゃん、これ」

理髪店のオバサンが理髪店の名前の入つたタオルを差し出してくれ  
たので、それを受け取り、青木クンの額にそつとあてがつた。  
そんなわたしの顔が見えたのか、口元が少しだけ弧を描いた。

遠くの方から救急車のサイレンが近づいて來た。

周囲を取り囲んでいた通行人たちが、救急車の音に反応して、わた  
したちの傍から離れ出した。

## 総合病院に運ばれて

青木クンとわたしは、二人一つの救急車に運ばれた。膝を擦り剥いただけのわたしは、青木クンの付き添いとして乗り込んだ。

救急車に乗り込んだ時、救急車の後にパトカーが滑り込んで来て、三人ほどの警官がゾロゾロと降りて来た。そして、女人たちに支えられていた女子高生を取り囲んだ。

体格のいい警官たちが笑顔一つ見せず、サラリーマンの男性や理髪店のオジサンに話を聞いていた。

それは、とても怖い光景に思えた。

わたしと青木クンは被害者で、怖い思いをしたが、これから置かれるその女子高生の立場を考えると寒気がした。でも、一番不憫なのは、わたしを庇つて、怪我をした青木クンだ。

さつきまで、元気にわたしに話しかけて来ていた青木クンだったのに今はぐつたりとしたまだ。

担架の上に乗せられた青木クンの手を泣きながら、ずっと握りしめていた。

総合病院に着いて、青木クンは救急搬入口から救急治療室に運ばれた。

救急治療室の前に置いてある待合の椅子に座り、閉じられた扉をジツと見つめていた。

救急治療室の前は薄暗がりで、一人切りのわたしは、寂しい思いと、不安な思いが交互して、何とも言えない気持ちになった。

ここに来てからすぐに、警察官と救急隊員に青木クンの身元やわたしの身元を事故の状況などを聞かれた。

ただでさえ鬱わつたことのない人たちの前で、受け应えする中で、心ぼ即手、終始震えていた。

取り調べが终わり、わたしは一人、この場所に取り残された。青木クンをそのままにして、家には帰れない。どうしよう。

青木クンの身になにかあつたら……どうしよう。

そう思うと涙が止めどなく流れて来た。

その薄暗がりの中で、ハンドタオルを眼にあてて泣いていた。

## 青木クンのお母さんが駆けつけて

しばらくすると、救急搬入口に中年の女性が駆けこんできた。その女性は入口の受付警備員に『青木』と名乗った。その言葉に立ち上がって、その女性に軽く会釈をした。

「光輝のお友達？」

そう言いながら駆け寄ってきた。

声が出なくて、首だけ縦に振った。

近くで見ると、青木クンに良く似ていた。

青木クンのお母さんのようで、何処かの会社の事務員の制服を着ていた。

「ごめんなさいね。付き合わせたみたいね。自転車の事故だつて、警察から連絡があつたの」

「青木クン……頭から血が出てて……」

思い出しただけで言葉が詰まつた。

すると、救急治療室の扉が開いて、中から女性の看護師さんが一人現れた。

「青木さんですか？」

「はい」

「担当医からの説明がありますので、中に入つて下さい」

青木クンのお母さんが看護師にそう促された。

「あの……青木クンの容態は？」

看護師にすがるような声でそう聞いた。

「ええ。髪の生え際を少し切つて、そこを少し治療しましたよ。大丈夫ですよ」

看護師が気を聞かせたのか一コリと笑つてそう言つてくれた。緊迫していた心がその笑顔で楽になつた。

「青木クン、大丈夫なんですか？」

「出血多くてびっくりしたでしょ？ うが、もう、大丈夫よ」

もう一人の看護師も笑つてくれた。

「色々ありがとうね。ここはもう、大丈夫だから、早く家に帰つてね。お家は遠い？」

青木クンのお母さんがわたしを心配したのか、そう聞いて来た。

「いえ、そう、遠くないです。帰れます」

軽くお辞儀をすると、看護師一人と青木クンのお母さんが救急治療室の中へと向かつた。

三人の背中を見送つてから、もう一度椅子に座つて大きく息を吐いた。

## 真菜からの電話そして……

その後、電車を乗り継ぎ、家へと向かった。時間はすでに八時を過ぎていた。

一応、家に電話をしたが、誰もいないのか出なかつた。

駅から自宅への道を歩きながら、携帯をカバンに仕舞おうとしているど、

チヤカチヤカチヤカ  
チヤカチヤカチヤカ

真菜のお気に入りの曲が鳴り出した。

この着信音は真菜だつた。

慌てて出て、耳にあてた。

『沙都？ 今、電話大丈夫？』

明るい真菜の声がした。

「うん。大丈夫だよ」

『あのや、沙都に一番に言いたくて電話したんだ』

「何？」

『わたし、涼のこと頑張つてみる』

涼のこと……

携帯から聞こえた真菜の声にまた、胸がドキンとなつた。

「涼……つて？」

『さつきね、家まで送つてもらつたの。不貞腐れてて面倒くさそくな顔してたけど、もう、暗いからつて、結局家まで送つてくれてさ。涼つて優しいね。カラオケでも、ブツブツ言いながら、リクエストした曲は全部歌つてくれたしさ。涼が優しいのは沙都限定だつて思つてたから、なんか、とっても嬉しかつたんだ』

弾んだ真菜の声。

わたしと青木クンが帰つてから相当楽しんだよつて思えた。  
確かに涼は優しい。

誰にでも気を使う子だ。

小さい頃から、自分に出来ることは相手を選ばず、優しく出来る子なんだ。

沙都限定……

真菜にはそう映つてたんだ。

涼の気持ちに薄々気付いていた。

真菜は……

涼が好きだつたんだ。

そして、わたしに彼が出来たことに寄つて、真菜は、なんの気兼ねも無くなつた。

(涼のこと頑張つてみる)

真菜の素直な言葉が頭の中でリフレインして、胸が張り裂けそうになつた。

『沙都？ 元気ないね。青木クンと何かあつた？』

血まみれで倒れていた青木クンが鮮明に思い出された。

今ここで、青木クンの事故のことを話すべきか……

青木クンの今のちゃんとした容態は分からぬ。

ヘタに大げさなこと言つて、青木クンに迷惑がかかるといけない。小さな噂が大きくなつて飛び交つことはよくあることだ。

学校にはすでに連絡が行つているはず。

明日になれば、みんなに知れ渡る。

それからにしよう。

今は……言わないほうがいい。

「ちょっと……色々あつて……詳しいことは明日話すよ」

『色々？ なになに？ もしかして、キスとかされた？』

『そんなんじやないよ。そんなんじやない！』

真菜の見当はずれの明るい声と言葉の内容に声を荒げてしまった。

ツウツウ

どこからか電話が入つたようで、通話中着信音が鳴つた。

「真菜、ごめん。他から電話が入ったから切るね」

真菜からの返答も聞かずに、慌てて電話を切った。

これ以上真菜と話しかけると、涼のことと青木クンのことが入り混じって、真菜を傷つけてしまいそうだった。

今のわたしには、真菜に対して、当たり障りのない相槌を打つほどどの余裕がなかつたのだ。

液晶画面には、涼の名前。

電話は涼からだつた。

## 涼の部屋へ

通話を切つたので、涼からの電話も途切れた。着信履歴を探して、すぐ、涼に電話を掛け直した。

「涼？」

『沙都……お前、今どこよ。まだ、帰つてないじゃないか』  
「うん。もう直ぐ家に着くよ」

『今から、俺ん部屋に来いよ。お前んちとうちの親、区の集会に出かけていないしさ……それに、沙都、i pod忘れてるぞ。お前の好きなアニメソング入れといてやつたから、それも取りに来いよ』  
いつもの優しい涼の声だった。

「うん。今から行く」

涼の声を聞いて、また、涙が溢れて来た。

青木クンとのことを聞かれるに決まっている。  
わたしを庇つて怪我をした青木クンに……  
断ることが出来なくなつた。

わたしのことを思つて、庇つてくれた青木クンに……  
断れない。

青木クンに何も言えない……

直ぐに涼に会いたい気持ちと、この重い気持ちが心の中に入り混じつた。

涼になんて言えばいい。

涼になんて……

いつものように、涼の家の玄関のドアを開けると、中では涼が玄関の敲きに立つて、わたしを待つていた。

涼の表情は電話で感じたものより、はるかに機嫌が悪そつた。  
『沙都……こんな時間まで、ずっと青木と一緒にだつたのか？』  
「うん。ちょっと色々あつて……」

「色々？ 色々ってなんだよ」

「べ……べつに涼の心配するようなことじやなこから。畠田……ち  
やんと話すよ」

「明日? どう囁ひこと?」

涼が勘ぐるよつて見つめて來た。

「いめん……今は言えないんだ」

「言いたくないなら言わなくていいよ」

「いめん……」

そう囁うと、

煮え切らないわたしの言葉に愛想をつかしたのか、諦めモードの涼  
がわたしの腕を取つて

「部屋に来いよ」

腕を掴まれたまま、靴を脱いだ。

そして、涼に手を引つ張られたまま、涼の部屋へと続く階段を上っ  
た。

部屋に入ると、机の上に置いてあつた、ピンクのipodを手に取  
り、わたしに手渡してきた。

「ありがとう……あのアニメソング入れといてくれたの?」

「うん。沙都が好きだって言つてたし、今日サッカー部のヤツにCD  
借りたから」

ipodのイヤフォンを自分の耳に入れ、操作する。

お気に入りの曲が流れて來た。

ハイテンションの曲。

さつきまでの重い気持ちが少しだけ晴れて來た。

好きな音楽を聴くと、嫌な事も忘れられる。

目を閉じて、曲に聴き入つてはいるが、急に……

背中から涼に抱きしめられて、耳からイヤフォンを外された。

「涼……」

「さつあ、達樹からの電話で、沙都とのこと聞かれた。あいつ、確  
信して質問してくるからさ……仕方なく、昨日の沙都とのこと……  
しゃべつちました」

涼の息が首筋にかかる。

腰に回されていた涼の手が熱い。

「達樹に……喋ったの？」

「沙都はバカだって言つてた」

唇を首筋にくつ付けながらそう言つた。

「達樹に軽蔑されたかな？」

「俺たちを応援するつてさ。そして、今日のカラオケでの真菜とのこと叱られた。青木と沙都のこと、イラついてたしさ……真菜が勘違いするような態度取るなつて、眞面目に怒つてきやがつた」

「真菜を家まで、送り届けたんでしょう？」

耳に涼の息が掛つてゾワッとした。

「もう、真菜から電話あつたのか？　ただ、送つてつただけだし」

涼の唇が首筋を何度も往復する。

「涼は……優しいもんね」

「沙都……もしかして焼いてる？」

「今日は……涼のことばかり考えてたから……ずっと……授業中も涼のことばかり考えてた」

「俺も……沙都のことばっか考えてた。授業なんか、全然耳に入つて来なかつたし。それより、沙都……お前、青木に断つたか？」

一番聞かれてたくない質問。

涼の腕に力が入り、体中の力が抜け始めた。

(涼のこと頑張る)

急に真菜の言葉がよみがえつて來た。

なんの気兼ねもなくなつた真菜は、これから涼に必死にアプローチするだろつ。

真菜は本気だ。

涼の手のひらが制服の上から胸に伸びてきて、フワリと包まれた。

わたしは青木クンには断れない。

でも、真菜に涼を取られたくない。

涼を……怒らせたくない。

涼の気持ちをこのまま繋げておきたい。

「青木クンに……断つたよ」

口から嘘を吐いて、ゆっくりと扉を閉じた。

## 涼が好きだ

「そつか……。良かつた。今日はマジでヤバイとか思つてたし。なあ、沙都……」

声のトーンが急に甘くなつた。

「なに?」

「このまま……続けていいか?」

耳元で優しくそう呟く。

涼に……

涼に大人しく抱かれていたなら……

涼は……わたしを好きでいてくれる。

涼は……ずっとわたしを好きでいてくれる。

このまま、涼に抱かれていたなら

涼の気持ちを繋ぎとめておける。

「いいよ……涼なら、いいよ

涼がわたしの制服のブラウスのボタンを一つずつ、はずし始めた。

ボタンを全開にして、ベストとブラウスを同時にはず取られた。

そして、わたしをフワリと抱き上げた涼は、そのままベッドの上に寝かせて、昨日と同じように覆い被さつて来た。

お風呂に入つたばかりだったのか、洗いざらしの前髪から、涼の茶色掛つた瞳が見える。

毎日見て來た涼の顔は男の子のわりに小さめだ。くつきりと縁取られた一重の目にほんとした澄ました鼻。独特的の薄い唇が、意地悪くも見え、幼くも見える。

視線を絡めたままゆっくりと顔を近づけて来て、わたしの唇を塞いだ。

眠るように眼を閉じた。

つこばむよつに、その薄い唇を何度も重ねてから、わたしの唇をこ

じ開け、舌を絡ませてきた。

わたしは涼が好きだ。

こうなることに何の違和感も無かつたのは事実だ。

ただ、照れくさくて、恥ずかしくて、それを取り除けば、こく、自然なことだった気がする。

触れ合う段階が早急過ぎただけで、心はぢやんとお互い繋がっていたんだと確信した。

指と指を絡めるだけでも、涼の気持ちを感じられて、身体中の力が抜ける。

目を閉じて、涼から漂つて来るボディーソープとシャンプーの残り香にめまいがするほど酔っていた。

涼の脣がわたしの身体の輪郭を縁取るように下に下にと滑り降りて来て、両手を生乾きの涼の髪に指を絡めた。

## 涼いめん

涼の一つ一つの動作に目を閉じたまま、温もりや息使いを感じていた。

「沙都？」

涼の動きが止まって、名前を呼ばれた。

「え？」

「お前、膝……どうした？ 擦り剥いて血が出てるぞ」  
わたしの脛に跨つたまま、涼が驚いたような声を出ししゃう詫ねて來た。

「ちょっと……転んだ」

「これだけ擦り剥いてたら、痛いだろ？」

「うん。少し痛むかな」

「怪我してるんなら、言えぱいいのこ。今日はほりで我慢するし。  
ちょっと待つてろ。手当してやるから」

涼がわたしの上から飛び降りた。

そして、床に落ちていたブラウスをわたしに放り投げて來た。

「これ着てろよ」

「手当？」

「足の治療なら任せとおけよ。俺、サッカー部だぜ。下へ行つて、  
消毒薬と絆創膏を持つてくるよ」

照れたように二コリと笑つて部屋を出て行つた。

静まり返つた部屋。

涼のお気に入りのフィギュアが眼に入った。

カラ ボードにキチンと整頓されてディスプレイされている。  
さつきまで触れていた涼の手の温もりが消えて、蒸し暑い気候なの  
になぜか寒気がした。

膝に眼をやると涼が驚いたはずで、両方の膝から血が出ていて、黒

い血の塊に土が付着していた。

自分の膝の痛みが分からないほど、気が動転していたんだ。  
血を拭くこともせず、そのまま電車に乗って、家まで茫然と歩いて

来た。

まるで、小さな子供みたいだ。

また、涙が込み上げて來た。

涼に嘘を付いた。

明日ばれるかも知れない、もしかしたら、一時間後にばれるかも知  
れない嘘を付いた。

涼を失いたく無い。

でも、今は青木クンに断れない。

どうすることも出来ないわたしの苦し紛れの嘘。

わたしは……バカだ。

顔を両手で覆つて、俯いた。

「沙都？」

涼の声がして、顔を上げると、タオルや絆創膏や消毒薬を手にして  
心配そうに覗き込む涼の顔があつた。

「泣いてんのか？」

「ううん。何でも無い」

「どうしたんだよ。そんなに痛むのか？」

「ううん。涼……ごめん。怪我してて……ごめん」

俯いたまま、涼に何度も頭を下げた。

「別に怒ってなんかいないし。怪我してたんなら仕方ないじゃん。

俺こそ……昨日の今日なのに、沙都を求めてごめん。今日の青木と  
沙都を見て、スゲー焦つてて、俺つて本当にどうしようもないよな。  
達樹にさんざん、沙都を大事にしろよって言われたのに。俺がこん  
な風になるのを見透かして、そう、言つてきたあいつにちょっとム  
カつくけどね」

涼が笑いながらベッドに腰掛けて、手にしていたタオルを血が出て  
いる膝に当ってくれた。

タオルを事前に濡らして来てくれたみたいで、ひんやりして気持ち  
が良かつた。

## 涼のゴーリホーム

器用に手当をしてくれた後、まだ、タオルケットを身体に巻き付けたままのわたしに

「沙都、その格好、眼の毒」

そう言いながら、部屋の中に置いてあるクローゼットから、青いサッカーゴーリホームを取り出してきた。

そして、それをわたしに差し出し

「もう、小さくなつて來たしさ。沙都にやるよ。これ着て帰れよ」

涼からゴーリホームを受け取り、涼の田の前で腕を通した。

「わたし、中学生の頃の涼と同じままなんだ。ぴったりだな」

涼がベッドの端に腰をドスンとおろして

「俺も、沙都の背を追い越した時、スゲー嬉しかったんだ。これで、沙都に似合つ男になれたかなと思つてわ」

そう言つて照れくわそうに笑つた。

「わたしは、逆に涼のくせに生意氣 とか思つてた」

「涼のくせにつてなによ。それ、酷くね？」

「だつて、涼、よく泣いてたじやん。小学校の時なんか、好きだった男の先生が転勤になつたつて離任式のとき泣いたりしてたし」

すると、両手をわたしの頭の上に乗せて

「お前、そんな昔のことよく、覚えてるな。こうしてやるー」

ベッドの上のわたしに乗つかつて来て髪をクシャクシャにしてきた。

「ちよ……なにそれ？ ここまでする？」

体制を立て直して、今度はお返しに、わたしが涼の頭を両手で持つて髪をクシャクシャにしてやつた。

髪をクシャクシャにしたままの涼が笑いながら、わたしを押さえこむように抱き付いて来た。

「沙都、仕返しすんじゃねえ。力も負けないからな」

両腕を取られて身動きが取れなくなつた。

「クソ……力も負けてる。悔しいー」

両腕を解放して今度は優しく抱きしめて來た。

「沙都、俺さ……沙都と思いが通じて本当に嬉しいんだ。今、スゲー幸せ。昨日だって、夢見ているんじゃないのかつて、信じられなかつたから」

その言葉に心がギュッと何かに掴まれる感じだつた。

身体が震え出しそうで、涼の背中に腕を回して抱き付いた。

「わたしも……嬉しかつたよ」

わたしはこんなに無邪氣に笑う涼に……

嘘を付いている。

帰り際、玄関まで出て來た涼に

「涼、このユニフォーム今夜からパジャマに使つていい？」

そう言つたわたしにまた、嬉しそうな顔で

「沙都にあげたから、沙都の好きなように使えよ」

「うん。ありがとう」

それだけ告げて、涼の家を出て、自宅に帰つた。

## 待ち伏せ

その夜は、涼から貰つたユニフォームを着て眠つた。

タンスの奥に仕舞つていたみたいで、防虫剤の匂いが微かに臭つていたけど、明日のことを考えると不安で仕方なかつた。

サッカーで使つた物は捨てられない性分の涼が、捨てるに捨てられず、かと言つて後輩たちに譲ることも出来ずにいた、このユニフォームには特別な思い入れがあつたのだろう。

そんな物をわたしに譲つてくれた涼のこの思いに抱かれたまま眠りたかつた。

青木クンの怪我が治れば、ちゃんと自分の思いを青木クンに告げよ。

それまで、涼を騙し続けることになるけど、涼を不安にさせたくない。

もし、本当のことが分かれば、中途半端なわたしに愛想を尽かすかも知れない。それだけはイヤだ。せっかく思いが通じあつたのに、涼を誰にも渡したくない。

瞼を閉じたまま、眠ることも出来ず、そんなことばかり考えていた。

次の日、朝連に出かける涼を自宅の玄関の前に立つて待ち伏せした。

一年生の涼は、朝連当番の田は先輩たちより早く登校しないといけない。

この時間は学校の最寄り駅へは電車がないので、学校までの七キロの距離を自転車で通う。

ガレージから、自転車に跨つた涼が出て來た。

玄関先で立つてゐるわたしに一瞬驚いた顔をしたが、直ぐに嬉しそうな顔をして

「あれ？ 沙都どうした？」

「おはよ。お化けでも見たような顔して驚かないでよ」

「そりや驚くだろ？ 每朝、ギリギリじゃないと登校しない沙都が俺より早く支度して待ってるなんて、真夏に雪が降るより珍しいじやん」

そう言いながら、朝日が差し込む空を見上げ、眩しそうな顔をする。

「一緒に行つていい？」

「それって、俺に後へ乗せりつて、言つてんの？」

「うん。サッカー部は足を鍛えなきゃ」

「警笛に注意されるようなトレーニングは禁止なんだけどな。しゃあねえな」

「ヤツタ」

肩に掛けていたカバンを自転車の籠に、これでもかと言つべらり押し込めて、後に飛び乗つた。

「言つとくけど、飛ばすからな」

「うん。了解！」

勢いよく口き出した涼の腰に手を回して、しがみ付いた。

涼との二人乗りは初めてじゃない。中学生に上がつたばかりの頃、仕立てたばかりの新品の制服で一人乗りして、河川敷を滑り降り、そのまま川へと飛び込んだことがあった。

新品の学生服とセーラー服がビショビショになった。

あの時は、涼が悪い、沙都が暴れたからだと擦り付け合ひばかりして、一人して、お互いの親に怒られたことがあった。

あの頃は、男とか女とかまったく意識してなくて、高校生になつた今でも、あんなことがないと、涼を男として見ていいなかつたんじやないかと思う。

この前、青木クンに付き合つてくれと言われて、背が高くて、なんてカツコイんだろうって、素直にそう思った。

野球部と聞いて、尚更カツコ良く見えた。

男の子のわりに清潔感があつて、照れて笑うところが可愛くて、直ぐにOKの返事をしてた。青木クンをTVの中のアイドルみたいな目で見ていた気がする。

彼が、どんな子かも知らない癖に、安易に返事をした。青木クンがどれほど自分を好きでいてくれたかなんて、想像すらしなかつた。

涼に押し倒されて、やつと、自分の非力さや、軽い部分に気付いた。

相手が、涼じゃなきゃ氣付かなかつただろう。

わたしは、涼が好きだ。

涼の傍で今までと同じようにずつと笑つていて。

涼の夏服のシャツに頬を寄せた。

「沙都？ お前、こんな時間に登校して、学校で暇だろ？」

「うん。涼の練習見て、時間を潰すから

「俺のプレー見て惚れなおすなよ」

「惚れなおさないし」

そう言つては両腕に力を入れて、もう一度涼の腰にしがみ付いた。

## 一人乗り

背中から、真夏の朝の口差しが暑いほど感じられた。涼の白いシャツが反射して、眩しいくらいだつた。

国道沿いをしばらく走つてから、近回りでもある公園の中へと進路を変える。

人もまばらなこの時間。犬の散歩をしている人たちとすれ違う。眠そうな人もいれば、犬と一緒に走っている人もいる。

両側の桜の木が立ち並ぶ細い遊歩道。

涼の自転車はスピードが落ちない。吹き抜ける風が心地よくて田を細めて涼の背中に頬をピタリとくつ付けた。

公園を横切つて、上り坂に入った。自転車のスピードが落ち、涼の息使いが聞こえ始めた。

「涼……大丈夫？」

「かなり……きついけど、頑張る」

腰を上げようとしたので、涼の腰から手を離した。自転車は蛇行しながら、どうにか坂を上り切つた。

「さすが涼だね」

「沙都、お前、重くなつてないか？」

逆に下り坂になつて余裕が出て来た涼が、そう、突っ込んできた。

「失礼ね。体重は中学の頃と変わってないから」

「そつかあ？俺の体力が落ちたか、沙都の体重が増えたのかどうちかだな」

「涼の体力が落ちたの」

「そつかな？じゃあ、これから朝連当番の時は違反トレーニングに付き合つてくれよ」

「さりげない、涼からの誘い。

「付きあって上げてもいいよ。協力する。涼の足を鍛える為、もつと太つて重くなるから」

「それだけは勘弁してよ。別に太らなくていいし。沙都はずつと、  
そのままでいるよ」

やう声を荒げて、わらに勢いよく自転車をこぎ始めた。

## 野球部のマネージャー

学校近くの商店前で、涼がごぐ自転車の後から飛び降りた。さすがに校門までは一人乗りは出来ない。

「まつ適当に授業始まるまで時間潰せよ」

「うん。取りあえず教室に行つてカバンを置いてくる。それから、サッカー部の練習でも見学しようかな」

「じゃ、俺行くわ」

肩手を上げて、一人で自転車をこぎ出し、校門へと向かった。わたしはカバンを肩に掛け直して、ゆっくりした歩調で歩きだした。

校門を抜け校舎内に入り、玄関で上履きに履き替え、自分の教室へと向かう。

一年生の教室は北側校舎の一階にあった。さすがにこの時間は誰も登校していないくて、教室へと続く廊下はシーンと静まり返っていた。

北側校舎はグラウンドに面しており、窓からは朝連に集合したサッカー部員や野球部員の姿が見えた。

野球部員の姿が目に入ると同時に青木クンのことを思い出した。さつきまでの涼との楽しい時間が一変して、心が灰色に変わり、暗いものになつた。

その場に立ち止まり、グラウンドから目を背けた。背けた先は、

1・5と書かれたドア前。

青木クンのクラスだった。

ボンヤリとした顔で、1・5と書かれたプレートを見ていると急にドアが開かれた。

ドアが開いた音に驚いて肩を窄めた。

1・5の教室の中からは涙ぐんだ女子生徒が飛び出て來た。廊下に立つていたわたしとはち合わず格好になつた。

女子生徒は運動部員のようでジャージ姿だった。サッカー部か野球部しか朝連は行っていない。

どちらかのマネージャーのように思えた。

涙ぐんでいたその女子生徒が、わたしの顔を見るなりもの凄い血相となつて

「この、厄病神！」

そう怒鳴りつけて来た。

「高井沙都つてあんたよね？ この前、光輝の彼女になつたばかりの女でしょ？」

目を見開いて、余裕の無い表情の彼女から目を離せなかつた。開かれた目は明らかにわたしに敵意を抱いていた。

「光輝、せつかく県大会の控え投手に選ばれたつて喜んでいたのに……光輝のお母さんに聞いたんだから、光輝はあんたを庇つて怪我したんでしょ？ なに平氣な顔して登校してきてんのよ！ あんたのせいだ、光輝は試合に出られないんだよ！」

ドン！

そう捲し立てて、わたしの胸を思い切り突き飛ばしてきた。

その衝撃で、勢いよく窓ガラスに背中を打ちつけられた。

「光輝が今までどんな思いで頑張つて來たと思つてるの？ 光輝のお母さんは、あんたを庇つて怪我をしたことは誰にも言わないでつて口止めして來たけど、あんたと付き合い始めて次の日にこんなことになるつてどう言つことよ！ 厄病神、厄病神、厄病神！」

窓ガラスに凭れかかっていたわたしの腕を掴んで、今度は廊下の床へと突き飛ばして來た。

抵抗すらしなかつたわたしは、床に這いつぶばるような格好で倒れ込んだ。

「光輝は……どうしてあんたなんか好きになつたんだろ？」

吐き捨てるようにそう言つて、わたしに背を向けて猛スピードで走り去つて行つた。

## 達樹に励まされて

まだ、誰も登校していない、静まり返った廊下に頬を打ちつけたまましばらく寝転んでいた。

廊下の端に埃が見えた。高校生になると、みんな掃除を眞面目にしないので、大人数が行き交うこの廊下はいつも埃が舞っている。そんな状態の場所に、寝そべつたままだった。あの子は野球部のマネージャーだろうか？

あの子に怒鳴り付けられたショックで、身体動かなかつた。

窓の外からは、野球部員かサッカー部員のかけ声が微かに聞こえた。

昨日、擦り剥いた膝が痛む。膝の痛みを庇いながら、ゆっくり起き上ると

「沙都？」

視線の先には、黄色と青のストライプのサッカースパイク。顔を上げると、ユニフォーム姿の達樹が心配そうな顔で立っていた。

「達樹……バイクのまま校舎内に入っちゃダメじゃない」

「沙都、あの野球部のマネージャーに突き飛ばされていただろ？外から見ていて、それで慌てて、ここへ走つて來たんだ。お前、大丈夫か？」

そう言つて、手を差し伸べてくれた。

「うん……ちょっと怖かったけど」

達樹の手につかり、立ち上がって、スカートとベストについた埃を叩いた。

「さつき、学校に来るなり聞いたんだけど、昨日、青木が事故にあつて、怪我したんだってな」

達樹の言葉に茫然となつた。

もう既に話は広まっている。野球部員も来ているから、サッカー

部に話が漏れても不思議は無い。

「沙都？お前……その事故の時、一緒にいたんじゃないのか？」

わたしの膝に視線を落したまま達樹が声を上げた。

心配そうな達樹の顔を見るなり、涙がワツと溢れ出て来た。

「達樹……どうしよ。わたしのせいで、青木くん、試合に出られな

いって……わたしのせい……」

「わたしのせい？」

「うん。青木くん……わたしを庇つて……」

泣きじやぐるわたしに困った表情を浮かべた達樹が

「なあ、沙都？ 涼のこと、青木に話したのか？」

嗚咽を吐きながら、首を横に振つた。

「言つてない……青木くんに断ろうとした矢先だつたの。でも……涼には嘘付いた。ちゃんと断つたつて直ぐにばれる嘘付いた

「ハアー」

達樹が大きくため息を付いてわたしの肩を一度叩いて來た。

「まあ、涼のことは気にするな。お前のそんな嘘ぐらいで、臍を曲げるようなヤツじゃない。そうじやなきや、こんなに何年も沙都に片思い出来るわけないだろ？ 問題は青木だろ？」

涼のことは気にするな……

達樹のその言葉はとても有り難いものだつた。

声にならない声を上げて、大きく頷いた。

そうだ。涼は……こんなことで、わたしを嫌いにならない。

ずっと、一緒にいたんだから、こんなことで涼はわたしを嫌いにならないけど、青木くんをこんな状態で付き離せない。

「青木くんに……断れないよ」

「なあ、沙都。あのさ、お前、青木に対して、どれだけ容量しめてんの？」

「えつ？」

「青木に対する容量だよ。だたの情だけで10%未満じゃない？」

昨日、今日付き合いだしたばっかでさ、青木の心の中も沙都への容

量なんて、多くて30%だね。50%は野球だらうじゃ。そんなもんじやないのか？」

達樹の言い出した言葉の意味が分からなかつた。

「そつきのあの、マネージャーの態度見ているとあいつ、青木に対してもかなりの容量のしめているぜ」

「どう言つこと？」

「お前は青木の心配ばかりしているけど、青木をお前以上に心配しているヤツがいるってこと」

「あのマネージャーつてもしかして青木クンのこと……」

「サッカー部と野球部つて毎日の練習時間は、ほぼ一緒なんだよ。だから、傍から見ているとよく分かるんだ。あのマネージャーがどんな目で青木のことを見ているかって。これはさ、涼に対しても言えるんだぞ。チアリーダー部が部室から出てきて、体育館に向かう時なんか、ボール見て無いもんな。あいつ」

達樹が思いだしたように豪快に笑い出した。

「達樹……」

「お前が無理して支えなくとも、青木にはちゃんと支えてくれる子がいるつてこと。それを青木が受け入れるかどうかは分からぬけど、他の男を思つている女に支えてもらつても、俺なら嬉しくないな」

達樹が、クシャリと笑い掛けってきた。

「涼さ、今まで生きて來た中で、今が一番でんぱつてるね。そんな、涼の思いを踏みにじつたら、お前だって、一生後悔するぞ」

達樹の言葉にコクリと頷いた。

## マネージャーの思い

達樹がグラウンドへ戻った後、そのまま廊下に立ち廻っていた。窓に目を向けるとグラウンドに涼の姿が見えた。

サッカーボールを追つて、元気に走り回っている。

いつもの光景だった。

涼の少し前屈みになつて走る癖。

華奢な身体のわりに筋肉質で、がつちりした両脚。

失敗すると、天を仰いだり、大げさに頭を両手で覆つたりする仕草。

どんなに遠くても、涼の姿なら直ぐに分かる。

あんまり近すぎて、ここまで涼のことをここまで思つていた自分に今ごろ気付いた。

涼も遠くからでもわたしの姿が分かるのだろう。

お互い、それほど相手を思い合つていた。

この上ない幸せだと思つた。

あのマネージャーはわたしたちと同じような気持ちで、いつも青木クンを見ていたんだろう。

ただ、元気で野球をする青木クンを。

そんな青木クンを、あのマネージャーから奪つてしまつた。

ただ、カツコイイからとかそんないい加減な思いだけで。

その上、わたしを庇つて怪我をしたのだから、女としてもマネージャーとしてもわたしを許せないだろう。

カラオケで、涼の腕に抱き付き、隣に座つた真菜に嫉妬していた。

自分がマネージャーに対して酷いことをしていたなど知らずに、

ただ、真菜に嫉妬していた。

マネージャーに対しても、青木クンに対しても申し訳ない気持ちでいっぱいになつた。

青木クンのわたしへの思い。

どれほどのものが分からぬけど、達樹が言つたよつて、自分が  
氣負ひするほど大きなものではない気がして來た。

そんなことより、涼を思い続けたまま、青木クンと付き合つて行  
くほうが、青木クンを傷つけることになると思つた。

青木クンが怪我をしたのは、わたしを庇つたからだ。  
予想しない事故だつたけど、そんな青木クンに謝ろう。

あのマネージャーにも謝ろう。

教室には向かわず、来た道を引き返して、青木クンのいる総合病  
院へと向かつた。

## 総合病院へ

青木クンが入院している総合病院は、学校近くのバス停からバスで5分ほどの距離なので、このまま歩くことにした。

学校へと向かう大勢の生徒たちに逆行しながら、下を向いたまま歩いた。

顔を伏せていれば、よほどの友達じゃないと声を掛けて来ないはず。

学校の敷地内を張り巡らせているフェンス伝いを歩き、朝の通勤ラッシュでもあるこの時間、車が終始行き交う国道に出た。そして、歩道を一直線に一キロほど歩いて、総合病院に着いた。

総合病院の玄関ロビーから入ると、外来患者と見られる患者たちが、たくさんソファに座っていた。

その傍を通りると、何人かの人気がわたしに注目している。

この時間、学生服を着ている自分が場違いだと思い知らされた。それでも、今の自分には、学校の授業なんかより大事なことだと思い直し、受付で、青木クンの病室の番号を聞いた。

青木クンの入院先は整形外科病棟だった。

額を切つて血を流していた青木クンを思い出した。

どうして、整形外科病棟なのだろうか？

不安な思いが心の中にズシンと入り込んで来た。

足を速めて、入院病棟のエレベーターに乗り込んだ。

あのマネージャーは試合に出られないと言っていた。

額の傷だけなら、試合に出られないことは無いかも知れない。

整形外科病棟……

身体を震わせながら、エレベータ内の階を示す点滅する数字だけを見ていた。

## 青木クンの病室前で

受付で聞かされた病室の番号を探しながら、朝日がチラチラ差し込む廊下を歩いた。

看護師たちが忙しく動き回っている。

朝の検温だろ？

面会時間外。面会時間は毎2時から夜7時とエレベーターを降りた直ぐの壁に貼つてあった。一度躊躇したが、思い直してそのまま歩き出した。

この総合病院はそれほど規則が厳しくないらしく、始める病院関係者はいなかつた。

慌ただしいナースステーションの前を通り病室まで来て、ノックをしようとして手を止めた。

病室内にだれかいようだつた。

引き戸になつていてのドアに三センチほどの隙間が出来ていて、そこから声が漏れて来ていた。

その場に立ちつくしたまま、少しだけ耳を澄ました。

力無い女子の声がする。

「光輝……あんた、どうするつもり？ 三年の先輩たち、かなり頭に来ている状態だったよ。監督も授業が終わり次第、駆けつけるつて言つてたけど、本当にどうするのよ」

さつき、学校にいたマネージャーの声だった。その後、直ぐにこじへ駆けつけたんだ。

「仕方ないだろ？ こうなつてしまつたんだし。そりやあ、先輩たちには申し訳ないと思つてるけど……」

落ち込んだ氣味のやけつぱみのような青木クンの声がした。

「腰の骨に……ヒビつて完治するのにどれくらい時間が掛るものなの？」

「腰の骨にヒビ……」

その言葉に固唾を飲んだ。

「さあ。一ヶ月から六ヶ月つてかなり大雑把な診断だつたけど」

「六ヶ月？ 何それ……。光輝、あんた、彼女が出来たからつて浮かれ過ぎてたんじゃないの？ 野球部全員に迷惑かけて、自分の体調管理が出来ないなら、彼女なんか、作るんじゃないわよ！」

涙ぐんだマネージャーの声が大きく響いた。

「彼女は何も関係ないだろ？ 真樹に言われなくともみんなに迷惑かけたこと、反省しているし悪いと思ってる……」

「彼女を庇つて自転車に跳ねられた、イヤ、追突されたんでしょ？ 自分の身体を考えないで、浮かれていた証拠じゃない」

「確かに……浮かれてたかもしね。だけどこうなつちまつた以上は仕方ないだろ？」

「仕方ないですまれるの？」

「うるさい！」

ガン！

何かが壁に当つた音がした。

青木クンが力任せに何かを投げつけようだつた。

「真樹に何が分かるつて言うんだ！ すまされないつて言つのは俺が一番分かつて。分かつてるからもう、放つておいてくれよ！」

「わたしは……わたしは、ここまで頑張ってきた光輝が、試合に出られないのが悔しくてたまらないのよ！」

「お前に何がわかる？ どんな思いでここまでやつてきたと思つてるんだ。真樹が頑張つて来たわけじゃないだろ？ そんなこと……俺が一番悔しいに決まつているじゃないか！」

「光輝……」

「帰れよ……もう、帰つてくれよ！」

その言葉にわたしは、弾かれたように病室の前から逃げ去り、ナースステーションのカウンター前にあつた開け放たれた空室へと身を隠した。

## 青木クンの病室で

部屋の前をマネージャーが啜り泣きながら通り過ぎた。  
そのマネージャーの走り去る靴音がヤケに耳に響いて来て、胸が  
苦しくなった。

青木クンを思うがあまりのマネージャーの言葉。

その言葉に彼が声を荒げた。

青木クンはわたしを庇ってくれていた。そのせいで、彼女をも傷つけた。

原因はわたし。青木クンが怪我をして試合に出られなくなつたのも、全て……わたしのせいだ。

そう自分を追いつめると、胸がムカムカして、喉の奥から嗚咽が出て來た。

全て、わたしの軽い返事からこうなつたんだ。  
わたしがみんなの日常を狂わせた。

胸を押されたまま、青木クンの病室へと視線を向けた。シーンと閉ざされた病室の中で、青木クンはどのような思いでいるのだろう。眼を瞑つて、青木クンを涼に置き代えて見た。

小学生の頃がずっと頑張つて來たサッカー。

中学、高校と続けて來て、授業前の朝連にだつて、サボらず眞面目に参加して頑張つている涼。

もし、誰かのせいで、涼が試合に出られなくなれば、今のわたしなら、あのマネージャーと同じように相手に怒りをぶつけるかもしれない。

ずっと頑張つている涼を見て來たから、マネージャーの気持ちは痛いほど分かる。

青木クンの思いとマネージャーの思いを想像するだけで申し訳ない気持ちでいっぱいになつた。

謝らなきや。

青木クンに怪我をさせた」とを謝らなきや。

罵られても仕方が無い。

鉛がぶら下がったような感覚の重い足取りで病室へと向かつた。病室の前まで来て、一度立ち止まり大きく深呼吸をした。

「コンコンヒノックをしてドアを開けると、柔らかな朝の日差しに包まれて、ベッドに横たわる青木クンの姿があつた。ドアをノックした音に気付いて、わたしを見た青木クンが、まるで薔薇が綻んだような笑い顔を浮かべた。

胸の奥深い場所が何かにギュッと掴まれた感じがした。

「沙都ちゃん……来てくれたんだ」

「うん」

「もしかして、学校サボった?」

「うん。青木クンが気になつて……整形外科病棟に入院していたから驚いた」

「「めん。びっくりさせたね。歩くと少し痛むくらいで自覚症状は全くないんだけどさ。腰と足の付け根にヒビが入つたみたい」「

「ヒビが……」「めんなさい。わたしを庇つたせいで、本当に「めんなさい」

ベッドから一メートルほど離れた場所で、何度も頭を下げて謝つた。

「ちよつ……そんなに大げさに思わないでよ。沙都ちゃんのせいじゃないから。あの場にたまたま居合わせて、運が悪かつただけだから

ら

「でも、本當ならわたしが衝突させていたんじや……」

「二人同時に衝突されていたかも知れないじゃない。沙都ちゃんだけでも衝突免れたから良かつたと思うけど」

「わたしを庇わなきや……青木クンは逃げ出せたんじゃないの?」

「沙都ちゃんだつて、膝に怪我したじやない。誰が悪いかって、そんなこと言い出したらキリがないよ。もう少し、カラオケ店に居れ

ばこんな事故に巻き込まれなかつたから、そうなればその時間に席を立つた俺のせいになるし……ね？ キリが無いでしょ？」

さつき、マネージャーに声を荒げていた青木クンとは別人のよう

に思えた。

## 青木クンの本音

視線を床に落とすと、さつき青木クンが力任せに投げつけたと見られる缶コーヒーのスチール缶が凹んだ状態で足元に落ちていた。

何気にしゃがんで、それを手に取つた。

顔を上げると、嬉しそうな顔をしていた青木クンが一変して真剣な面持ちになつた。

視線は、わたしが手にしている凹んだ空き缶へと向けられていた。

「「めん。本当は、俺、全然余裕なんか無いんだ」

「青木……クン？」

「それ、投げつけて、凹ませたの俺だし」

青木クンの眼に暗い影が差し込み、声のトーンも重くなつてマネージャーと話していた時と同じになつた。

「こんなことになつて先輩たちに顔向け出来ないし、この先のことを考えると……全然余裕なんかないんだ。こうなつてしまつた以上は仕方ないとと思うけど、俺が抜けたことに寄つてチームが乱れたりしないかと不安で押し潰されそうになるんだ」

そう言つてベッドの上の白いシーツを両手で握りしめた。

青木クンが本音を喋りはじめた。

声を震わせて……

本音を喋りはじめた。

「みんなに迷惑掛けて、どの面下げて復帰出来るんだとか……もう、野球が出来なくなるんじやないのか? ってそんなことばつか考えてる」

「「めん……青木クン」「めん」

「だから……沙都ちゃんは悪くないんだつて。俺こそ……「「めんね。俺の本当の心の内を打ち明けちゃつたりして……」

「つうん。無理して笑顔作られるより、本当の気持ち言つてくれた方がいいから」「

そう言つて駆け寄り、青木クンの田線に合ひつみつベッドの傍でしゃがんだ。

「沙都……ちやん。俺……全然カツ口良くないだろ? こんなことでメソメソしたりしてさ。呆れるよな」

青木クンから眼を離さず思い切り顔を横に振った。

「つうん。そんなことない。それが……当たり前だよ。誰でもそうなるって」

青木クンが一囁りと笑った。

「沙都ちゃん……優しいね」

シーツから手を伸ばして、ギュッとわたしの手を握りしめて來た。冷たい手だった。

青木クンの冷たい手を握り返して言つてしまつた。

「わたし……が傍に居るから……元氣出して」

## 学校をさぼつて

病室を出てから、学校には帰らず、そのまま家に帰った。家は、ママもパートに出かけた後だつたらしく、誰もいなかつた。合鍵で家の中に入り、そのままカバンを机の上に放り投げて、ベッドに倒れ込んだ。

仰向けになつたまま、天井を見上げると、涙が頬を伝い始めた。青木クンを放つておけない。

あんなに弱気になつている青木クンに、別れようとほどうしても言えなかつた。

この先、監督や野球部員たちやマネージャーに責められて、もつと弱氣になるんじやないかと思うと……別れようとは言えなかつた。そして、自分の中にも確かなものが芽生えていた。

涼と青木クンとの間で揺れ動いていた気持ちが、はつきりとした形で、現れていた。

このまま……青木クンの傍について、助けになりたい。  
無力なわたしだけど……助けになりたいと思つた。  
だから、もう……涼とは付き合えない。

今までどおり、ただの幼なじみの関係に戻ろ。

涼が好きだけど……

涼が好きで堪らないけど……青木クンの彼女になるとそひ、心に決めた。

眼を瞑れば、涼の顔ばかりが浮かんで消えた。

涼の笑つた顔や、拗ねた顔がまるでスライドショーのように浮んで消えてを繰り返した。

そして最後に、涼に抱きしめられた時のことを思い出した。

あの時、何度も好きだと言ってくれた涼。

わたしも……呪文に掛つたように涼が好きと答えていた。

抱きしめ合つて、初めてお互いの肌の温もりに触れて、幸せで…

…心が満たされていた。

「涼……」

嗚咽を吐きながら何度も涼の名前を呼んでいた。

そして、泣き疲れて、そのままの格好で眠りに落ちた。

## 涼の部屋へ

蒸し暑い部屋の中で、ベットリ寝汗をかい状態で眼が覚めた。白い天井が歪んで見える。昨日から泣いてばかりいるせいか、瞼がヤケに重い。

もう一度眼を閉じて、睫毛に滲んでいる乾きかけの涙を手の甲で拭つた。

瞼と同じように重い身体を起こし、汗ばんだ腕を伸ばして、枕元の目覚まし時計を見ると三時を回ったところだった。

結局学校へは、何も連絡せずに無断で休んでしまった。

ベッドから起き上がり、机の上のカバンから携帯を取り出した。病院に入るなり、電源を切っていた携帯には、たくさんのメールや着信ありの表示が出ていた。履歴を見ると、涼からのものほとんどだった。

一緒に登校したにも関わらず、居なくなつたわたしを必死で捜そうとしたらしい。

達樹から話を聞いていると思うので、青木クンの病院へ向かつたと想像は出来ただろうけど、それでも電話や『今、どこ?』と書かれたメールが何着も入っていた。

嘘がばれて怒っているだろうか?

怒っているなら、涼はメールさえして来ないはず。

ただ、わたしが心配で仕方がなかつたんだろう。

メールも着信履歴も昼休みを終えた時間が途絶えていた。

一時を最後に、涼からの履歴は無かつた。

返事を寄越さないわたしにキレたように思えた。

電話やメールじゃなくて、直接涼に会つて話がしたかった。

かと言つて、青木クンの噂話に持ち切りであろう学校へは行く気がしなかつた。

『厄病神』

マネージャーの言葉の通り、そう思われて当然で、数奇な視線を浴びせられるのは眼に見えている。

涼に会いたい……

別れを言い出さなきゃいけないのに……

涼が怒りだすかも知れないのに……

ただ、涼に会いたかった。

青木クンと付き合って行こうと決めたにも関わらず、涼に甘えようとしている自分がいた。

それは、虫の良過ぎる話だと分かっているけど、涼の傍に居たかつた。

今まで、どんな辛い時も涼がいたから乗り切れて來たから。

ただ、涼に会いたい。

閉め切っていた窓を開けて、ここから見える涼の部屋の窓を見つめた。

誰もいない涼に家を暫く、ポンヤリと見つめていた。

そして、携帯を握りしめたまま、もう一度ベッドに倒れ込み、熱く腫れぼったく感じる瞼を閉じた。

## キー キー キツ

開け放された窓の外から聞こえた自転車のブレーキの音。ビクリとして眼が覚めて、ベッドから飛び起きた。

部屋の中はオレンジ色の西日に包まれていて、急いで窓に駆け寄り、外を見ると涼がガレージに自転車を入れているところだった。

涼が学校から帰つて來た。

いつもより早い時間の帰宅だった。

自転車を置いてから、チラリとこちらに眼を向けて來た。わたし

に気付いた涼は、一いつともせずに、そのまま眼を逸らして玄関へと向かった。

かなり、怒っているようだった。

涼が家の中へと入ったのを見届けると、わたしは直ぐに部屋を飛び出した。

いつものように、勝手に涼の家の玄関を開けて、一階にある涼の部屋へと階段を駆け上がった。

一回、涼の部屋のドアの前で大きく息を吸つた。

「涼……いる？」

返事がなかつた。

ドアをコンコンと叩いてから

「涼？　いないの？」

ドアノブに手を掛け、捻り開けようとすると

「入つてくんな！」

ドアノブを持ったまま、その怒鳴り声に弾かれて、そのまま立ちつくした。

「涼？　「ごめん……電話くれてたのに、ごめん。青木クンの事故のこと聞いた？」

「聞いた。青木、お前を庇つて事故つたって、みんな噂してたよ。隣のクラスの野球部のマネージャーは一日中ずっと泣いてたって言つてた」

「……」

「達樹に聞いたけど、沙都、お前……本当は青木に別れようつて言つてないんだろ？」

「ごめん……涼、嘘付いてごめん。昨日は、どうしていいか分かんなくて、涼に嘘付いた。だから、ちゃんと話すから中に入つていいく？」

「お前……今日は青木の病院に行つたんだろう？　青木はお前を庇つて怪我して、それで……どうするつもりだよ」

「涼……」

「お前なら、そんな青木を放つておけないだろ?」

「涼……」

「分かってるよ。沙都がどんな性格か、俺が一番分かってるよ。」

「涼……」

「青木とこのまま付き合つんだろ?」

「涼……」

「だから……もう、この部屋には入ってくんない」

突き離すような涼の言葉。

それと同時に、少しだけ開いていたドアが押し戻され、中から鍵をかけられた。

涙がワツと溢れてきた。

ドアをドンドン叩いきながら

「涼……開けて。そんなの嫌だよ。青木クンとは、涼が言ったように付き合つて行ひつと思つてる。でも、涼にこんな風に突き離されるの嫌だよ」

「沙都、お前、青木と付き合つても、今まで通り俺の部屋に出入りするつもり?」

「うん。だつて……涼は幼なじみだし、兄妹みたいなもんだし……ずっと一緒にたじやない。学校から帰つて家に誰もいなくとも、涼がいたから寂しくなかつたんだよ。このまま突き離されるの嫌だよ」

「沙都とは……もう、無理だよ。俺ら、一線越えちまつたし、この部屋に入ると俺はお前に何するか分かんないぞ。沙都は俺にとつてはもう、女なんだ。幼なじみでも、兄妹でもない。もう、女なんだ! だから……一度とこの部屋に入るな!」

## 涼の言葉

「そんなの……涼は涼で、わたしはわたしじゃない！」

「もう、沙都はただの幼なじみなんかじゃないんだ」

「そんなの嫌だよ。涼……そんなの嫌だよ。涼が傍にいないとわたし、嫌だよ」

ドアを叩きながらズルズルと力なく座り込んだ。

「俺だって……沙都を諦めんの嫌だよ。けど、こうなつちまつた以上はお前、青木を振り切れないだろ？ 振り切れるか？」

涼の問いに即答出来ない自分がいた。

「青木……俺と一緒にでスポーツ特待生だつて知つてるか？ 授業料とかも免除されてるらしいけど、それも危うくなるんじゃないかつて、噂しているヤツもいたんだ。俺、それ聞いて……人ごどじやなくてさ。今の青木の気持ちも……なんか……分かるんだよ。スゲー落ち込んでいるんだろうなって。そんな状態の青木をお前、突き離して俺のとこに来れるのか？」

涼と同じ立場の青木クン。

二人、同じようにそれぞれ野球とサッカーを頑張つて来た者同士。

『青木の気持ちも分かる』

そう言った涼の言葉を復唱して眼をゆっくりと閉じた。

余裕のない青木クンの表情を思い浮かべた。

わたしは……あんな状態の青木クンを振り切れない。

「野球もサッカーも運動クラブの中じゃ、花形でさ。色んなところから注目浴びて、スゲープレッシャー掛つてるのも分かるんだ……そこそこは、沙都より、俺の方が青木の気持ちはよく分かるつもりだよ。それに沙都はへんなどこで責任感が強いってとこも、色んなこと考え過ぎて、欲しいものを欲しこつて言えないことも……俺が一番よく知ってる」

「涼……わたし、欲張りかな？ 青木クンの彼女になつても、涼の

傍に居たいつて思つわたしは、欲張りかな？」

両手で顔を覆いながら、泣き崩れた。

「男と女は違うんだよ。お前は青木の彼女なんだから……もひ、この部屋には来るな」

「涼……」

「青木の……傍にいてやれよ……」

「ドン！！」

涼が部屋の中の壁を叩いた。

やり切れない怒りをぶつけた音が響いた。

涼がぶつけた怒りのその音に、フツと肩の力が抜けた。  
体中に入っていた力が、ダラリと抜けて、冷たく閉ざされたドアを見つめた。

『青木の傍にいてやれよ』

本意じゃない、そう言つしかない涼のこの言葉が……

胸の中にズシリと压し掛かった。

その言葉だけが耳の奥に響いて来て、カラカラに乾いた口からは、何も言い出せなかつた。

あれだけ溢れていた涙も止まつた。

ボンヤリとした思考のまま、ゆっくり立ち上がり涼の部屋を後にした。

薄暗い部屋の中で、灯りも点けずに窓を見ていた。  
涼の泣いている姿が見えているわけでもないのに、楽に想像出来

て、ただ、閉ざされた窓を見ていた。

小さい頃から、どちらかが泣くと、お互いを慰め合つていた。  
いたずらして叱られて泣いている涼を『そりやあ、涼が悪いよ』

と責めながら慰めていた。

女友達とケンカしてわたしが泣いた時は、『沙都も悪い』と笑い

ながら慰めてくれた。

そんな風に、慰め合いつゝとめできなくなると黙り寂しくて、どうしようもなくなつた。

青木クンの気持ちが分かるから……

わたしを突き離すことしかしなかつた涼。

涼は昔からわたしなんかより何倍も優しい子だった。

相手を思い過ぎて、勝負」とに向かない性格だつて、達樹にいつ

も言われていた。

そんな優しい涼を傷つけた。

『青木の傍にいてやれ』

そう言つしかなかつた涼の気持ちが痛いほど分かる。

わたしは……

青木クンの傍にいよ。

青木クンの助けになるよう……傍にいよ。

そうすることができるようだが、涼の優しい気持ちに答えることが出来るんだと

……  
そう、自分に言い聞かせた。

## 夏休みに入つて

次の日、いつも通り学校へ登校した。

教室へと続く廊下を歩いていると、あの真樹と呼ばれていたマネージャーの友達からは『厄病神』の声を浴びせられた。

教室に入ると、クラスメイト達からは、思つた以上に数奇な眼で見られているのがヒシヒシと分かつた。

そんな視線に挫けそうになつたけど、教室の一番後ろの席にいる涼を少しだけ視界に入れて、気分を落ち着かせた。

わたしと視線を合わそうとしない涼だつたけど不思議と姿を見るだけで気分が落ち着いた。背筋をピンと伸ばして、何事にも動じず、やるだけのことはやろうと心に決めた。

明日からは夏休みと言つこともあって、授業はなく、ただ、慌ただしく過ぎて行つた。

そして、わたしはチアリーダー部の顧問の先生に、休部届を出した。

期間は未定だったが、一応夏休み中の間だけと、頭を下げた。膝の調子も良くないこともあり、部活を休部することにした。休むほどの怪我ではなかつたが、毎日青木クンの病院に通う為に夕べから休部を決めたいたのだ。

続いて部室に向かつて、キャプテンや先輩たちに頭を下げた。

同じ部の真菜は、休部すると告げたわたしに、「沙都を応援する」と言つてくれた。

「変わりに涼とのことも応援してね」

と付けくわえて來たので、二口りとだけ頷いてその場をやり過ごした。

学校から一旦家に帰つて、私服に着替え、青木クンの入院する総合病院へと向かつた。

病院に着いて、病室に向かうと青木クンと青木クンのお母さんが居て、昨日はパジャマを着ていた青木クンが私服でベッドに腰かけていた。

部屋も綺麗に片付いている。

「沙都ちゃん。来てくれたんだ」

わたしの出現に座っていた青木クンがゆっくりと立ち上がった。

「あれ？ どう言つこと？」

綺麗に片付いている病室内を見渡しながらそう聞いた。

「うん。ごめん。連絡出来ていなくて。あのね、野球部の監督の勧めで転院することになったんだ」

「転院？」

「うん。監督の知り合いの病院。リハビリ施設が整っているらしいくてね」

「遠いの？」

「うん。学校からは遠くなるかな？」

「高井さんだっけ？ よかつたら、転院先へ車で一緒に行きましょう」

青木クンのお母さんがにこやかに話しかけて来た。

「はい。青木クン歩けるの？」

「うん。少しくらいならね。コルセットしているし、痛みもそれほどないんだ。それに半分はスポーツ疲労骨折みたいなもんだし」

青木クンがくつきりした一重の眼をこちらに向けて舌を出した。

「スポーツ疲労骨折？」

始めて聞く言葉だった。

「そうなのよ。事故だけが原因じゃないんだから、高井さんは責任を感じないでね」

青木クンのお母さんが青木クンによく似た笑顔でそう言つてくれた。

## 新しい入院先へ

青木クンも青木クンのお母さんもわたしに氣を使つてくれて、とても優しい人達だつた。

わたしが、緊張しているせいもあるが、それを敏感に読み取つて、出来るだけ気負いしないように穏やかな空気を作つてくれる。

それは、作られた空氣でも、今のわたしにとつてはとても嬉しかつた。

「じゃあ、行きましょうか」

幾つかに纏められた荷物入りの紙袋を一つ持つて

「これ、持ちます」

「高井さんが来てくれて良かつたわ。荷物を取りに一回もここに通わなきゃいけなかつたけど、一度ですんだわ」

そして、青木クンのお母さんの運転する車に乗り込み、総合病院を後にした。

青木クンの新しい病院は、個人経営の病院でわたしの家から七キロほど離れた場所にあつた。国道沿いに建つていて、頑張れば、家からは自転車で来れる距離。

毎日通うには、総合病院よりバス代が掛らない分、財布の中身には有り難い。

個人病院に引っ越しがすんだ後、少しだけ青木クンとお喋りをした。

監督の励ましがあつたせいか、昨日よりは断然元気になつていたが、それでも、今後のリハビリ兼筋肉トレーニングなどのメニューを地道にこなして行けるか不安だと言つていた。

今まで、広いグラウンドの中で練習してきたせいか、狭い空間でジッとしていることが苦痛で、気ばかり焦つてしまつとも言つていた。

そんな青木クンに、氣の利いた言葉が見つからずにつるわたしが

いて

「きっと、野球が出来るようになるよ。わたしに出来ることがあるなら何でも言って欲しい」

ただ、励ますようなことしか言えなかつた。

翌朝、夏休みなのに早起きした。

パパの弁当を作つているママの横に立つて手伝いを始めた。

「あら？ 沙都。珍しいわね」

「うん。わたしもお弁当作つて。手伝つから」

「まあ。沙都が料理なんて、真夏に雪が降るんじゃない？」

ママが笑いながらそう茶化して來た。

「料理くらい覚えようかなつて思つて」

ママが大きな眼を見開いて

「ふーん。やっぱ、彼が出来ると違うのね。沙都もやっぱり女の子だつたんだね」

ホウレンソウのお浸しを刻みながら笑い出した。

ママには青木クンと言つ彼氏が出来たことと、わたしを庇つて怪

我をして入院していることは言つてあつた。

そう打ち明けた時のママの最初の一言は

『涼君にすればいいのに』

だつた。

その言葉はズシリと胸に刺さつたが、大げさに笑い飛ばした。

『涼が彼氏なんて考へられないよ』

『ふーん。毎日一緒だとそんなもんのかな？』

まるで、友達に言つてゐるみたいにママがわたしを冷やかした。本当は今のわたしの中の涼は彼氏以上の存在だ。

そのことだけはほつきつと自分の心の中に位置づけてある。

「そんなんじゃないけど……今日から毎日病院へ通おうかなって思つて」

「面倒くさがりの沙都がねえ。うん。やっぱ愛の力だね。じゃあ、卵焼きの準備お願ひね」

変に納得したママの命令通り、冷蔵庫から卵を一つ取り出した。生まれて初めて作った弁当。初めて焼いた卵焼きは火がきつ過ぎたみたいで、焦げてしまった。ママは笑いながら、わたしの失敗作をパパの弁当にも詰めていた。

わたしが料理をすると、パパに被害が及ぶことを学んだ。保冷剤を入れたカバンにお弁当を入れて、自転車の籠に入れ、勢いよく走り出した。

七キロの自転車の旅。最近こんな長い距離を乗ることが無かつたので途中、バテ気味だった。夏の日差しが眩しいし暑い。病院へ着く頃には汗でぐっしょりになりそう。

タオルが何枚が必要だ。

そんなことを色々考えながら、やつとの思いで病院に着いた。中はエアコンが利いてて、汗がヒンヤリしてきた。

病室に入ると、青木クンがベッドの上で起き上がっていた。

「沙都ちゃん……もしかして、自転車できた？」

わたしの火照った顔を見てそう思つたらしく、青木クンが心配気にそう声を掛けて來た。

「うん。バテそうだつた。結構きつい」

「あの、無理しなくていいよ。俺、大丈夫だから」

「うん。無理はしないから。大丈夫。ちょっと、ダイエットになるかな？」

そう言つて笑い飛ばした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5429y/>

初めては幼なじみ

2012年1月13日17時54分発行